



荒野に希望の灯をともす
〜医師・中村哲 現地活動35年の軌跡〜



教えられなかった戦争・沖縄編
— 阿波根昌鴻・伊江島のたたかい —



中村哲

7/26(土)

13:30-15:00
(開場 13:00)

阿波根昌鴻

8/30(土)

13:30-15:20
(開場 13:00)

中軽井沢図書館
2階 多目的室

軽井沢町長倉3037-18 中軽井沢駅

いい映画を観よう実行委員会では、今後も上映会を
続けていきたいと考えています。

お手伝いくださる方を随時募集しています。

集会、地区公民館、お店等での出張上映会もいた
しますので、お気軽にご相談ください。

入場無料

カンパのご協力をお願いします。
ペシャワール会への寄付と、チラシ代
等の経費に使わせていただきます。

定員50名様

当日先着 10名様
ネット予約 40名様

駐車場は 町営 中軽井沢駅前駐車場(中軽井沢駅 東側)をご利用下さい。

開館中に図書館カウンターへ駐車券を持参し、無料券をお受け取りください。

インターネット予約・詳細情報

<https://goodmovies.show-room.jp>



作品紹介

教えられなかった戦争・沖縄編 —阿波根昌鴻・伊江島のたたかい—



1999年制作 / カラー / 110分
映像文化協会

私たちの平和運動は、米軍基地を日本からなくしただけでは終わらない。
平和憲法を世界に広め、地球上から戦争も武器もなくなる。そして地球の資源をすべての人で平等に分け合える社会、能力に応じて働き、必要なだけ受け取れる社会を築くまで続けるのです。

「平和の最大の敵は無関心」

阿波根昌鴻さん

阿波根さんは戦後の伊江島土地闘争において、命を守るために土地を守るのだから、土地を守るたたかいで命をなくしてはいけないといい、穏やかに相手を説得し、敵の中に味方を作っていくというしなやかなたたかきな沖縄のたたかきを実行されました。

石原昌家さん（沖縄国際大学教授）

反戦平和資料館を通して願うことは、戦争のすさまじさ、愚かさを伝え、命の大切さ、二度と戦争があつてはいけないということを知ってもらうことです。

阿波根さんとともにたたかき続けている

謝花悦子さん（「やすらぎの家」代表）

63才で中央労働学院に入学した阿波根さんは、こちらが圧倒されるぐらい真剣な態度で勉強されました。科学的社会主義を学んで、世の中のこれまでのことが全部ひっくりかえるような新しい喜び、学ぶ喜びを感じていたあの顔付きを今でも思い出します。

阿波根さんが中央労働学院で学んだ畑田重夫さん

荒野に希望の灯をともし —医師・中村哲 現地活動35年の軌跡—



2022年制作 / カラー / 90分
(株)日本電波ニュース社

アフガニスタンとパキスタンで35年にわたり、病や戦乱、そして干ばつに苦しむ人々に寄り添いながら命を救い、生きる手助けをしてきた医師・中村哲。

NGO平和医療団日本（PMS）を率いて、医療支援と用水路の建設を行ってきた。

活動において特筆すべきことは、その長さだけでなく、支援の姿勢がまったく異なることなく、一貫していたことだ。一連の活動は世界から高く評価され、中村医師は人々から信頼され、愛されてきた。

いま、アフガニスタンに建設した用水路群の水が、かつての干ばつの大地を恵み豊かな緑野に変え、65万人の命を支えている。

しかし、2019年12月。用水路建設現場へ向かう途中、中村医師は何者かの凶弾に倒れた。その突然の死は多くの人々に深い悲しみをもたらした。

だが、一方で私たちに強く問いかけもする。中村医師が命を賭して遺した物は何なのか、その視線の先に目指していたものは何なのか。

中村哲が遺した文章と200時間に及ぶ記録映像をもとに、現地活動の実践と思想をひも解く。

戦後80年

6月23日 沖縄慰霊の日、8月6日 広島原爆の日、8月9日 長崎原爆の日には深く平和を祈ります。映画を通して戦争を止めるよう戦争を伝え、命と自然の尊さ、平和の大切さを分かち合いたいと思います。

阿波根昌鴻（1901－2002年）が1955年から65年頃にかけて撮影した膨大な写真（約3200点）から選んだ約350点が「否戦の心と人間愛の眼 阿波根昌鴻写真展」として沖縄を皮切りに全国巡回展、開催中です。

阿波根昌鴻写真展をあなたの近くでも開いてみませんか。市民ギャラリーなどで開催可能です。温かなまなざしの平和を発信できます。



死んでも
撃ち返すな！

軍拡か平和か。
岐路に立つ日本に
今必要なのは
中村哲医師の生き様だ！

アフガニスタンで銃撃され、死亡した中村哲医師（1946-2019）は、現地代表を務めるNGO「ベシャワール会」として第1回沖縄平和賞を受賞するなど、沖縄とのつながりも深かった。アフガニスタンで開設する診療所に「戦乱の地域に平和の基地を造ることで県民の気持ちを代弁したい」との思いで「オキナワ・ピース・クリニック」と命名することも語っていた。沖縄に関連して中村医師が残した言葉を振り返る。（田吹遥子）
「平和の声を沖縄が代弁」沖縄平和賞授賞式（2002年）

中村さんは、平和賞で贈られた賞金の一部で、アフガニスタンの山岳地帯に「オキナワ・ピース・クリニック」と命名した診療所を開設した。

2002年8月31日付の琉球新報によると、診療所を開設したのはアフガニスタンのクナール州ダラエ・ピーチ渓谷のシンザイ村。同診療所は周辺地域の人々にとって唯一の医療機関になるとしている。中村さんは「アルカイダがいるとの情報で、米軍が集結しつつある」と現地の緊迫感を伝え、「紛争の地域であればこそ大事。暴力的な解決や、力で力を押さえ込むのではなく、（クリニックを造ること）で無言の力としたい」「戦乱の地域に平和の『基地』を造ることで、県民の（平和を願う）気持ちを力を持って代弁したい」と、クリニックへの思いを込めていた。
「平和がいかに重要か体験を通して伝えたい」（2017年）